

研究成果報告書

課題名

長久保赤水旧蔵資料についての検討—赤水日本図の作製過程の解明に向けて—
調査期間

2009年8月1日～2010年7月31日

申請者

上杉和央（京都府立大学文学部）・豊田智美（高萩市歴史民俗博物館）

はじめに

長久保赤水（1717-1801：以下、赤水）は、安永8年（1779）に『改正日本輿地路程全図』（図1）を刊行した。この図こそが出版日本図において、もっとも早くに実質的な経緯線が記された図であり¹、その意味において、赤水およびその作製日本図は日本地図史にとって欠くことのできない重要な人物であり、地図となっている。

このように、非常に著名な赤水日本図であるが、意外にも赤水自筆の史料や長久保家に伝来する関連資料をもとにその作製過程について、検討する試みはこれまでにほとんどなされてこなかった²。

本研究では、赤水日本図について、史料に依拠しつつ、その作製背景を検討することを目的と1つとする。

この目的を達成するためには、これまでほとんど利用されることのなかった長久保赤水資料についての総合的な調査が不可欠となる。本研究の目的の2つめは、この長久保赤水資料についての基礎的調査である。



図1 改正日本輿地路程全図（安永8年版） 長久保赤水資料

1. 長久保赤水資料について

(1) 作業の目的

これまで、史資料に基づいた検討があまりなされてこなかった理由の1つに、長久保家資料そのものが学界にあまり知られていなかった点を挙げることができる。赤水の子孫にあたる長久保氏によって紹介・検討がなされることもあったが³、海野ら一部を除けば、その他の研究者が資料にアプローチすることはほとんどなかった。

しかしながら、近年、そのような状況に変化が生じた。平成17年(2005)11月10日には、「長久保赤水資料」が高萩市の指定文化財となった。現在においても、資料の所蔵先は、基本的には赤水の子孫にあたるいくつかの家であるが、その多くは高萩市歴史民俗博物館に寄託されており、研究目的の閲覧の場合、所蔵者の許可を受ければ博物館にて閲覧が可能となっている。

このように、原資料を用いた研究が、これまでに比べて取り組みやすい状況となりつつあるが、ごく簡単な資料目録があるのみで、適切な写真撮影・写真帳の作成などがなされておらず、的確な資料へのアプローチには困難が伴う状況下にある。

そこで、本研究では、まず長久保赤水資料全体を通覧して、その特徴を把握し、特に地図作製に関わると思われる資料については4×5フィルムによる撮影を行い、写真帳を作成することで、研究者等が資料にアプローチすることが簡便となるような基礎的環境を作ることとした。

(2) 長久保赤水資料

長久保赤水資料は、高萩市有形文化財に登録された赤水関連の資料であり、子孫宅で確認された資料や高萩市歴史民俗資料館が収集してきた資料など370点からなる⁴。

370点の資料のうち、もっとも多いのは「書簡・文書・記録」で191点登録されている。次に多いのは「絵図・地図・地図編集資料」であり、114点となっている。残りは「書籍」47点、「絵画・器物」13点、「その他」7点である。

「書簡・文書・記録」はいわゆる私信の類が多いが、中には「近江之図」を赤水に送った際の書肆須原屋伊八からの書簡(表1内の102。以下、番号のみ提示)といったように、書肆と赤水との交流を示すものも含まれている。長久保赤水資料には、寛保2年刊「近江国図細見図」(8)が含まれており、書簡に述べられる「近江之図」に該当する可能性もある。

なお、市指定文化財には含まれていないが、書肆と赤水の関係を示す書簡として、年不明正月三日長久保源五兵衛・高橋又一郎宛浅野彌兵衛・彌八郎書簡が知られている⁵。内容は、新春の挨拶である。

表1 長久保赤水資料 撮影目録

番号	資料名	サイズ・重量	所有者	種別	書き手
1	東北南部から近畿図	98×104cm(全103.4×155.8cm)	H	図	A
2	日本図+ポルトラノ図	日本図 66×66.6cm ポルトラノ図 54.7×78cm (全72.3×169.3cm) 516g	H	図	A
3	ポルトラノ図	54.5×80cm 114g	H	図	A
4	陸奥・出羽国図	31.3×79.7cm 31g	H	図	A
5	出羽国分郡図	27.7×47.1cm 20g	H	図	A
6	上毛国中道図	27.6×80.7cm 24g	H	図	A
7	日向国櫛原図	45.6×54.6cm 26g	H	図	A
8	近江国細見図	80×136.5cm 48g	H	図	B
9	橘守国図	85.7×102cm 141g	H	図	A
10	安藝国図并備後國中広島領附	78×80cm 129g	H	図	A
11	大日本疆域図	33×70.7cm 24g	H	図	A
12	飛騨国図	59.5×84cm 54g	H	図	A
13	奥州南部十郡分界図	60.6×77.5cm 資2-14地文6	H	図	A
14	口巖之邦	27.6×38.5cm 資2-14地文6	H	図	A
15	南部津軽図	20.4×29.5cm 資2-14地文6	H	図	A
16	河内国千早城図	27.7×41cm 資1-2地文9	H	図	A
17	日向国行藤山	27.7×38.2cm 資1-2地文9	H	図	A
18	平群郡	29.9×41.5cm 資1-1地文7	H	図	A
19	河内国千早城図	30.4×43.5cm 資1-1地文7	H	図	A
20	地名覚書(倉内沼付近)	18×23.4cm 資1-1地文1	H	図	A
21	八戸～盛岡付近図	24.4×34cm 資1-1地文1	H	図	A
22	人国記 下北・津軽半島	34.4×24.2cm 資1-1地文1	H	図	A
23	多賀城からの距離	15.7×23.5cm 資1-1地文1	H	図	A
24	地名及び距離覚書(出羽)	12.6×23.6cm 資1-1地文1	H	図	A
25	地名及び距離覚書(江戸～一関等)	15.8×23.6cm 資1-1	H	図	A
26	地名及び距離覚書(但馬・栃木付近)	25×19.1cm 資1-1	H	図	A
27	地名覚書(猿島郡～香取郡)	14.5×63.9cm 資1-1地文17	H	図	A
28	京泊から片浦海図	30×40.5cm 4-2-3-2	H	図	A
29	薩摩櫻嶋ヨリウツホ嶋迄図	47×66.2cm 古図8	H	図	A
30	松前へ ツカル三馬屋…	15.4×22.3cm 資1-1地文11	H	図	A
31	松前ヨリ ラヨへ 白神…	15.4×22.3cm 資1-1地文11	H	図	A
32	面高海路廿六リ…	15.4×22.3cm 資1-1地文11	H	図	A
33	隠岐図・鳥海山等	15.4×59cm 資1-1地文11	H	図	A
34	他領下相田村中妻村 水戸御領豊田村 水閣猿 論所図 常州多珂郡花園山図付	29.4×82.7cm 資3-3-2地文16	H	図	A
35	常陸国多珂郡車郷猿田山浄蓮寺奥院三 十三観音図	29.4×41cm 資3-3-2地文16	H	図	B
36	人国記 日向国図	13×28.1cm 資3-1-4地文12	H	図	A
37	津軽海峡海路図	29.5×44cm 資3-1-4地文12	H	図	A
38	仙台部分図	33.5×55.8cm 資3-1-4地文12	H	図	A
39	大明二直十三省図(写)	27.8×156cm 4-2-3-1	H	図	A
40	咸鏡道から吐魯番	27.8×152.5cm 4-2-3-2	H	図	A
41	福建・広東・広西・雲南付近	27.9×157.5cm 4-2-1	H	図	A

番号	資料名	サイズ・重量	所有者	種別	書き手
44	朝鮮半島と九州一部図	22.5×43.4cm 4-2-3-2	H	図	A
50	朝鮮・琉球	28×40cm 4-2-3-2	H	図	A
51	新板大明十三省絵図	40.5×62.9cm 4-2-3-2	H	図	A
56	疑問	30×42cm 4-2-5	H	図	A
66	奥州宮城郡市川村多賀城址壺碑図	26×34.4cm 資2-3-6地文10	H	図	A
67	上野国十四郡 郡分図	19×25.5cm 資2-3-6地文10	H	図	A
69	唐土歴代州郡沿革図手書原稿	35.3×38.5cm 4-2-5	H	図	A
72	唐土歴代州郡沿革図 両晋南北六朝郡国図	38.1×39.9cm 4-1-5	H	図	A
73	改製日本扶桑分里図	84.6×134.8cm (全92.7×190cm)	H	図	A
74	改正日本輿地路程全図	83×128.5cm (全134.5×179cm)	H	図	A
75	頼弥太郎子息十二歳にて図之	14.4×136cm 10g	H	図	C
76	四神地名録	15.8×23.7cm 資2-2文19	H	図	C
77	天應四神地名録	27×23.5cm 資2-2文19	H	図	C
78	奥州郡分之略図	41×101.5cm 19g	H	図	C
79	長門赤間文司国	39.7×27.5cm 資1-2文12	H	図	C
80	薩摩国鹿児島之略図	27.4×39.5cm 古図2	H	図	C
81	肥前国虹が濱之図	30.3×34.3cm 古図6	H	図	C
82	筑前国大宰府都府樓乃図	30×47.1cm 古図6	H	図	C
83	肥前福岡図	28.7×75.3cm 資1-3文26	H	図	C
102	近江之図一枚右通差上		H	書	C
160	一延喜式ヲ考ルニ由利郡…	19.4×41cm 資3-1-3地文15	H	他	A
161	大清廣輿図	188×183.3cm	K	図	A
334	京都旅日記	28.8×39cm×4	T	籍	A
338	改正日本輿地路程全図	134×83.5cm	Y	図	A
339	改正日本輿地路程全図	134.9×83.4cm	Y	図	A
340	改正日本輿地路程全図	129.7×85cm	Y	図	A
341	改正日本輿地路程全図	134.6×87cm	Y	図	A
342	改正日本輿地路程全図	130.4×85.7cm	Y	図	A
345	改正日本輿地路程全図	81.8×131cm	NK	図	A
346	改正日本輿地路程全図	84.6×128.8cm	NK	図	A
352	大清廣輿図	189×186cm	NK	図	A
353	地球万国山海輿地全図説	35.5×91cm	NK	図	A
360	日本国郡輿地路程全図	105×186.5cm	NK	図	C

所有者 H:長久保甫氏 K:長久保和良氏 T:長久保智保氏 Y:横山功氏 NK:長久保赤水顕彰会 S:歴史民俗資料館
種別 図:絵図・地図・地図編集資料 書:書簡・文書・記録 籍:書籍 物:絵画・器物 他:その他
書き手 A:赤水・赤水著作物 B:赤水書込有 C:その他

このような長久保赤水資料のうち、本研究では①長久保赤水が作製ないし刊行した資料、②地図作製に関わる可能性の高い資料、という2つの視点から資料の選択を行い、写真撮影を実施した(表1)。そして、写真帳を作成し、高萩市歴史民俗博物館に備え置くことにした結果、一辺が1メートルを超えるような大型資料についても、手で簡単に確認できることになった。さらに、フィルムスキャンによるデジタル化についても実施しており、より詳細なレベルまで、パソコン画面上で確認することが可能となっている。この写真帳およびデジタル画像化については、本研究のみならず、今後の諸研究者にも活用できるものであり、長久保赤水資料についての基礎的整備として、非常に有益な作業であった。

2. 赤水日本図の源流

(1) 赤水日本図の作製

赤水は安永8年(1779)に『改正日本輿地路程全図』(図1)を刊行した。赤水日本図と総称されるこの図は、幕末までに少なくとも5回の改版が確認され⁶、さらに類版や海賊版も多数知られており、江戸時代後期を代表する日本図として位置づけられている⁷。経緯線が記載された初めての出版日本図としても名高い⁸。

この図には儒者柴野栗山(1736-1807)による序文が付されている。それによれば、赤水は20年余りに渡る自らの見聞や文献調査、そして旅人や知人から得る情報をもとに、日本図を完成させていったという。

そのような日本図作製の過程で収集、活用されたと思われる資料の一部が長久保赤水資料の中に残されている。なかでも『改正日本輿地路程全図』の原図と考えられているのが、明和5年(1768)の年号を持つ「改製扶桑分里図」(図2)と題された赤水自筆の日本図である⁹。図2の全体図および部分図を一見して分かるように、この図には地形や地名などの多くに胡粉による修正痕がある。様々な情報を得るなかで日本のかたちや地名を検討していった幸安の思索過程が刻まれていると言ってもよい。



図2 長久保赤水作「改製扶桑分里図」(1768)とその部分図(左)

長久保赤水資料

この図をめぐって、海野は次のような興味深い指摘をしている。

「赤水の『改製扶桑分里図』は森幸安の『日本分野図』を基図としていくらか改訂をくわえたものに過ぎず、日本列島の図形にも大差はない」¹⁰

ここにある「日本分野図」とは、現在国立公文書館に所蔵されている「日本志輿地部 日本分野図」（以下、「日本分野図」と表記）を指す（図3）。海野のこの指摘によれば、「改製扶桑分里図」は「日本分野図」との図形的な差はほとんどないということになるが、先にも触れたように、「改製扶桑分里図」は赤水自体の修正が大幅になされており、海野のように即断することは筆者にはためらわれる。実際に両者の図形を比べてみても、一致する部分がないわけではないが、海岸線の表現には違いも多く、「大差はない」と断言することは難しい。「改正扶桑分里図」の作製の際に「日本分野図」を参考としたという海野の指摘それ自体については、筆者も同意するが、その関係性はより慎重に論じる必要があるだろう。

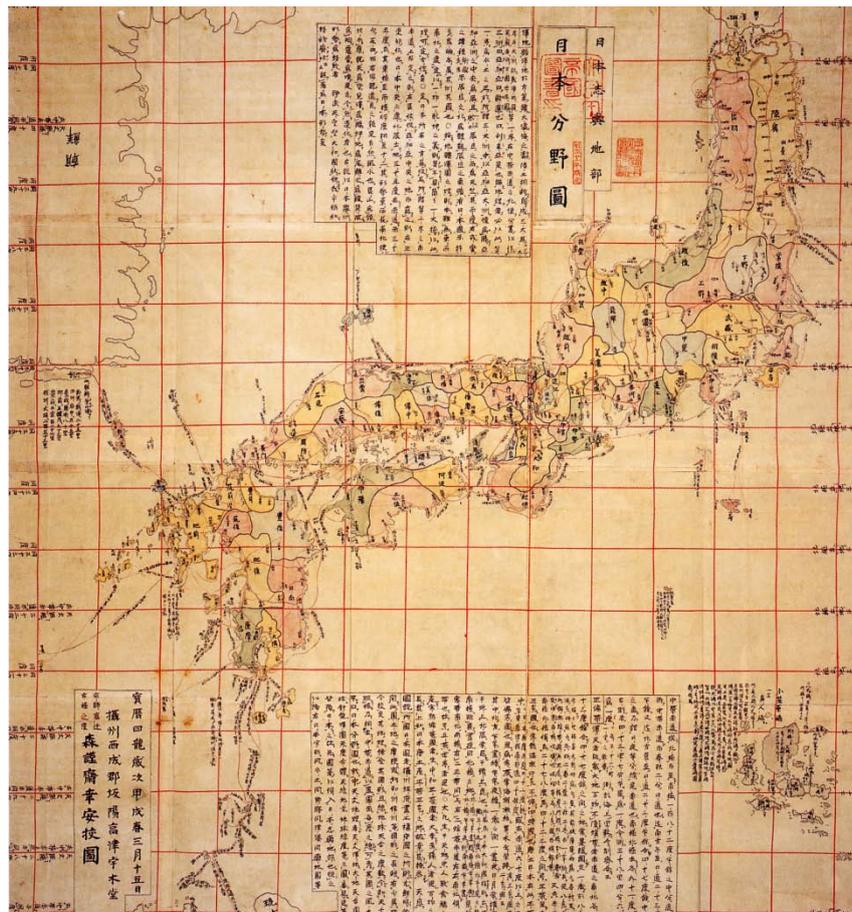


図3 森幸安作「日本分野図」（1754）

国立公文書館蔵

また、海野は『改正日本輿地路程全図』と「日本分野図」とも比較している¹¹。そこでは、『改正日本輿地路程全図』の経緯線の記入が「日本分野図」の影響であることを述べ、次のように論じている。

「図形その他についても、要するに赤水図は幸安図を増補改訂したものにすぎない」¹²

海野のこの結論は非常に力強いものではあるが、赤水日本図の意義を矮小化しすぎており、同意しえない。たとえば、室賀が赤水の「二〇年の苦心」について「記載内容の厳正詳確を期した点」¹³に求めている点、また海野の議論を受ける形で矢守が、「しかし栗山の序文にいうように…（中略）…編纂の努力が重ねられたのもまた事実」¹⁴と指摘している点についても、十分に斟酌する必要がある。

（2）長久保赤水資料「橘守国図」をめぐって

長久保赤水資料のなかに「橘守国図」(9) という日本図がある(図4)。この図は裏書に「橘守国図」と表記される以外、模写の経緯などを示す史資料などは発見されておらず、また今回の調査においても残念ながら発見することはできなかった。ただし、筆跡は赤水のものであることは間違いないという¹⁵。橘守国(1679-1748)は大坂で活躍した浮世絵師であり、『唐土訓蒙図彙』(1719)の挿絵担当として知られる。

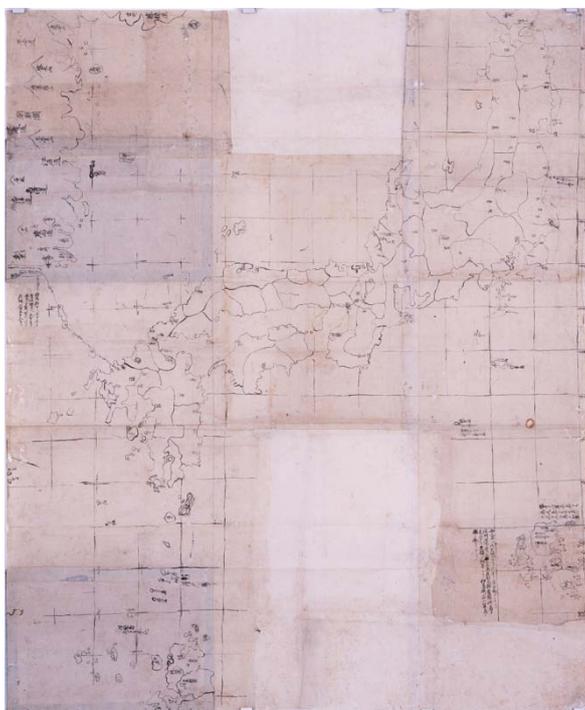


図4 長久保赤水作「橘守国図」
長久保赤水資料

実は、この図こそ、海野らによって「森幸安の日本分野図の模写」¹⁶として紹介された図に他ならない。しかし、海野らはその中で資料名を明示しておらず、それ以上議論を進展させることもなかった。また、長久保によるトレース略図を伴う資料紹介もなされているが¹⁷、「日本分野図」との関係についてはまったく触れていない。そのため、これまで本図についての理解が一般に広まることはなかったのである。そこで、ここでは「橘守国図」について、改めて検討を加えることにしたい。

まず、確認せねばならないのは、この図が本当に「日本分野図」の模写図であるかどうかという点である。これに関して、「日本分野図」に記される幸安の識語に、次のような注目すべき記述がある。

図する所の日本の図は、摂州坂府の画工、橘守国の貯ふる所、尤も鮮明なり。然るに、この図を閲するに、土地の広狭、あるいは和州信州などの如き図形の長短、小異あり。故に今その地の理を校定、その図形を條全、かつ地球天合の度数を線し、天文極を距むこと、及び中帯の赤道を相去ることを知らしむ。図面に度ごとの線を置くをもって、その国の風土を考ふべし。号けて日本分野の図と曰ふ。

これに従えば、「日本分野図」の原図は橘守国が所蔵していた鮮明な日本図であった。しかし、土地の広狭・長短に不備もあるので、修正を施し、さらに度数を記す線を書き加えて完成させたのが「日本分野図」であるという。よって、大和国や信濃国の形状、そして経緯線の有無という点で、橘守国所蔵の原図と「日本分野図」とは明確に区別できることになる。

この点をふまえて赤水が模写・所持した「橘守国図」を見ると、経緯線が確認でき、大和国、信濃国の形状も「日本分野図」に酷似している。全体の海岸線についても類似しており、「橘守国図」が橘守国所蔵の図ではなく、幸安作製の「日本分野図」を直接の原図として成立していることは疑いない。ただし、赤水が「日本分野図」それ自体から模写を作製したのか、それとも第三者が模写をしていた図から、さらに模写するかたちで作製したのかについては、明らかにしえない。

「橘守国図」という名称で残されているのは、「日本分野図」の精密な模写ではなかったことに起因するのだと思われる。「橘守国図」は幸安が重視した「書」（ないし「志」）の情報を完全に捨象し、その部分を空白にする形で模写している。そのため、「元は橘守国の図であった」という情報のみが誤った形で伝わったのであろう。

「書」の捨象のほかにも、「橘守国図」は「日本分野図」と異なる点はいくつかある。その1つが地図内の地名や文字注記の省略である。「日本分野図」は、城下町および主要な宿場・湊が表現され、陸上・海上の交通路が記されている。それに対して「橘守国図」は基本的に城下町のみが記され、その他の情報は失われている。しかも、模写されていない城下町もかなりある。

この図は資料内に「橘守■図」とあり、塗りつぶし部分もおそらく「国」であることから、「橘守国図」と同様、赤水が橘守国による図として認識していたことが分かる資料である。ただし、「朝鮮・琉球」に表現される朝鮮半島および琉球の表現は「橘守国図」のそれらとは大きく異なっており、「橘守国図」への直接の影響を認めることはできない。このほかの琉球を描いた図は、「朝鮮・琉球」で表現される琉球よりもはるかに簡略な図であり、また地名も記載されないものである。よって現状では、直接的に参照した資料は失われてしまった、ないし未発見である、ということになる。ただ、そのような未発見資料も含め、このりゅうきゅうや朝鮮半島についての事例は、赤水が1つの地域について、いくつかの資料を所持していたことを示す事例となっている。

いずれにしても、このような赤水の足跡をたどる限り、先述した海野の議論にはやはり若干の修正が必要であることが分かる。赤水の手元にあったのは、「日本分野図」の粗略な模写図なのであって、赤水が日本図の作製にあたってそれを参考にしたことは間違いないとしても、赤水日本図が「日本分野図」と大差ないであるとか、その増補改訂に過ぎないといった断言を強力に下支えするほどの精度を備えたものではないのである。

改めて確認すると、赤水は幸安の「日本分野図」もしくはそれを基にした図から「橘守国図」という名称の模写図を作製した。赤水の経緯線描画の発想には幸安の図が確かに影響を与えているのであり、この点において、日本地図史における幸安の果たした役割は高く評価されてよい。ただし、海野が論じるほど、赤水が「日本分野図」に大きく依拠しているかと言えば、そうではない、とすべきである。室賀や矢守が指摘しているように、多くの資料の間を逍遙する中で仕上げていく過程に、赤水の独自性を見出しうるであろう。

ここで、赤水が参照した資料のなかに、幸安が作製した別の図が含まれていた可能性についても触れておきたい。川合英夫は幸安作製の「日本志東海部 伊豆国属島地図」（国立公文書館蔵、以下「伊豆国属島地図」）に黒潮に関する注記が見られること、そしてその注記が赤水日本図にも踏襲されていることを論じている¹⁸。川合によれば、幸安は「黒瀬川」として地図に初めて黒潮を描いた人物であるという。注記表現が似ている点からして、赤水がこの図（もしくはその系統図）も何らかの形で参考にする機会があった可能性があるだろう。

ただし、この「黒瀬川」の事例においても、赤水が幸安の地図に完全に依拠したわけではない点は指摘しておく必要がある。赤水は幸安の注記に「クロシホ」という表現を付け加えた。同じく川合によれば、これは黒潮という名称表現の最古の例になるという。もちろん、常陸国の庄屋であった赤水が太平洋の黒潮についての知識を生活経験の中で得ていたとは考えにくく、何らかの資料に基づいて表現したのだと思われる。残念ながら、今回の資料調査においては、この点に関する資料を見つけることはできなかったが、今後、別の場所で原典となるさらに古い資料が見つかる可能性は高い。いずれにしても、この黒瀬川－黒潮の事例は、経緯線の事例と並んで、資料を博搜する赤水の姿勢を示すものと言えるだろう。

幸安側からみれば、これら赤水に関する事例は、出版されることのなかった幸安の地図が18世紀後半の一部の知識人に一定の影響を与えていたことを明瞭に示すものである。幸安が大坂の知識人たちと交流を持っていたことは、既に指摘されている¹⁹。幸安の活動時期が1761年までしか確認されていないこと、一方の赤水の大坂訪問は1767年、および1774-5年であることを考えれば、幸安と赤水が直接交流した可能性は低い。

ただし、数年前に発見され、本研究でも写真撮影を行った資料に「京都旅日記」(334)がある(図6)。この資料は記載年が示されておらず、文中に「午三月四日迄」という記載があるのみである。この「午年」について、横山氏は宝暦12年(1762)と想定されておられる²⁰。この資料は11日間の京都での滞在を記した旅日記であり、11日目は帰路が記されているが、初日については、「初日東山見物」と始まるのみで、どこから京都にやってきたのかは記されていない。この11日間の滞在以前に大坂に赴いていた可能性もゼロではないだろう。そうなれば、幸安の活動期間にきわめて近い時期に赤水が京ないし大坂に来ていたことになる。これ以上は推測に推測を重ねることしかできないが、新たな資料の発掘が期待される点として記しておきたい。

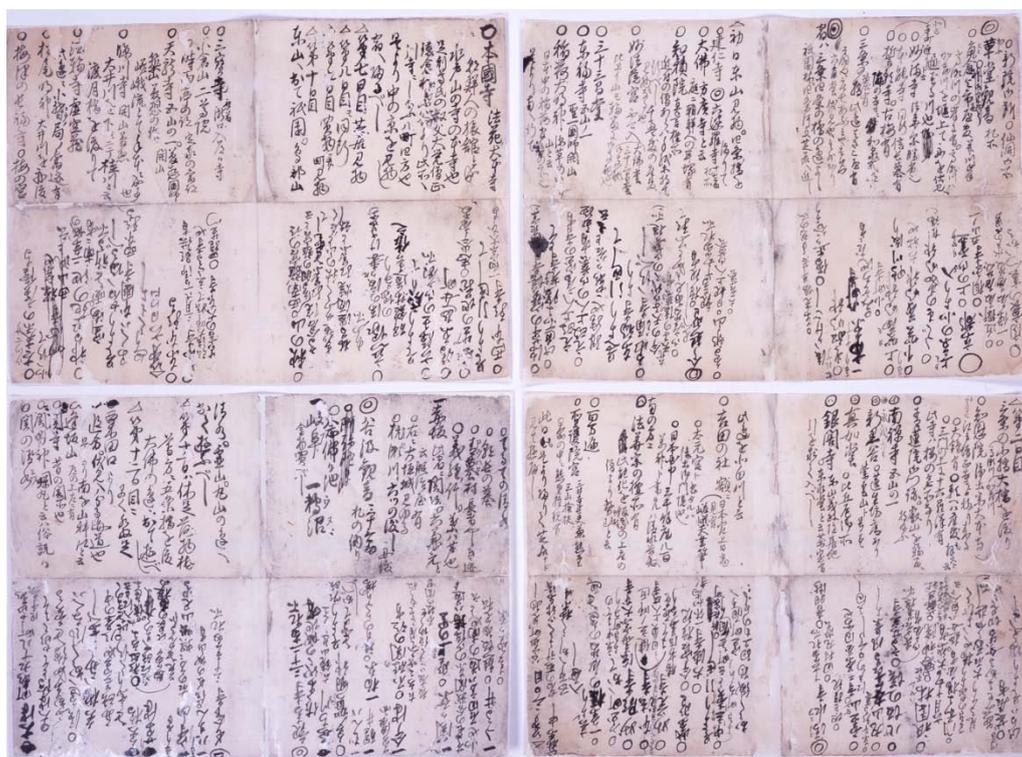


図6 「京都旅日記」 長久保赤水資料

ただし、知識の伝播に直接の交流が不可欠というわけではない。間接的に情報を入手することは可能であり、また赤水は実際にそのようなことが可能な立場にあった。というのも、赤水は大坂の版元、浅野弥兵衛から日本図や世界図を刊行しており、大坂には縁があった。先に触れた浅野弥兵衛からの年始のあいさつ文は両者の交流を明瞭に示すものである。また、当時の大坂で最も著名な知識人の一人である木村兼葭堂（1736-1802）を始め、大坂ないし畿内の知識人たちと交流をもっていた²¹。このようなネットワークを通じて、大坂の知識人たちのもとにあった地図を参照することは可能な立場にあった。特に木村兼葭堂は地図の蒐集をしていたことが知られており、幸安とも地図の貸借を行っている²²。また、幸安は「伊豆国属島地図」を2枚作り、その1枚を同じく地図蒐集で知られた大阪天満宮宮司渡辺吉賢（1703-没年不詳）に贈っているが²³、吉賢と兼葭堂とは家族ぐるみの付き合いであり、両者の間にも地図貸借が知られている²⁴。このような知識人ネットワークを考えれば、赤水が幸安の地図にたどりつくのは、意外に容易なことだったのかもしれない。

（3）津軽・下北半島への関心

長久保赤水資料には、多様な地域の地図資料を含むが、なかでも津軽・下北半島地域について表現された地図が多く残されている。表1に掲げた順番に見ていきたい。

・「陸奥・出羽国図」（図7）

31.3×79.7cmの変形紙片に東北地方全体が表現される。地形および地名が墨書きされ、郡界線および郡名が朱書きで表現される。郡名を囲む形によって、領域を表現している旨の「凡例」が添えられている。胡粉による修正痕が多く



みられ、下北半島や男鹿半島は大きく描き直されているのが特徴である。

図7 「陸奥・出羽国図」 長久保赤水資料

下北半島付近の場合（図8）、朱は修正ないし加筆のためにも用いられている。たとえば、津軽半島との間に「此間何里アルヤ」という疑問文が墨書きされているが、その横に「十一里」という朱筆が添えられている。また、城沢と野邊地の間は墨で線が引かれ「此間の内海ハ五六里」と墨筆されているが、その線を朱で改めて上書きしている。野邊地の西側の地形については、内



図8 「陸奥・出羽国図」(部分) されている。そして、下北半島と蝦夷地との間については、蝦夷地内の「白カミ」のある半島を下北半島に近くなるように地形を朱で訂正し、その場所と下北半島の先端とを「七里」として朱筆している。

図8を見ても分かるように、この地域は、朱による修正以前に、胡粉と和紙を用いて修正がすでに施されていた場所である。すなわち、少なくともこの付近については2回以上の修正が加わっているのであり、赤水がこの地域に深い関心を寄せていたことがうかがえる。

・「奥州南部十郡分界図」(図9)

南部・津軽付近の簡略図である。ただし、簡略でありながら、修正の手もかなり入っており、①付箋による修正、②墨による上書きや線引き・塗りつぶし、③胡粉による修正といったいくつかのタイプが認められる。また、郡名および郡界線については、朱による追記もみられる。これらの前後関係はふめいである。

下北半島部分には、野邊地と檜川付近を結ぶ直線と「五里」という注記があり、また湾内に「九艘十六リ／外濱廿七リ」と表現されている。これらの距離表現はその他の地域には表現されておらず、この地域のみに見られる。



図9 「奥州南部十郡分界図」

長久保赤水資料

・「南部津軽図」(図10)

20.4×29.5cmの小紙片に津軽・下北半島および蝦夷地(渡島半島)が表現されている。墨一色によるもので、これまでの3種の地図に比べると、小品ながら整然としている。よく見ると墨で塗りつぶしたり、斜線で修正している点もあるが、ごく一部であり、またそれらの修正も単なるミス修正という要素が強く、異なる見解がせめぎ合って生まれた修正というものではない。よって、この作品は、ほぼ最初から完成品として描いたと見ることができる。

地図の脇には「永永(ママ)五年十月十三日津軽黒石ノ千箇寺ニ逢テ記スル所」とある。元号に不備があり、これ以上議論のしようがないが、赤水の生前中に「永」がつく元号は「安永」のみであり、仮に「安永五年」(1776年)であるとすれば、「改製日本扶桑分里図」を作成した後で、かつ『改正日本輿地路程全図』の刊行前の赤水の知的営為を示す貴重な資料と位置づけることができる。

地図表現から、この点を検討しておけば、「南部津軽図」に表現される地名については、下北半島の「恐山」および蝦夷地の「大沢」を除くすべての地名が『改正日本輿地路程全図』で確認される。また、蝦夷地の場合、『改正日本輿地路程全図』には「改製日本扶桑分里図」に表現されていない「子フ田」・「イシ川」・「泊」が記載されており、その由来は不明であったが、この3つについてはいずれも「南部津軽図」に記載がある。「イシ川」についてはその東側に河川が表現されている点も同じであり、『改正日本輿地路程全図』の典拠となっていることを強くうかがわせる内容である。

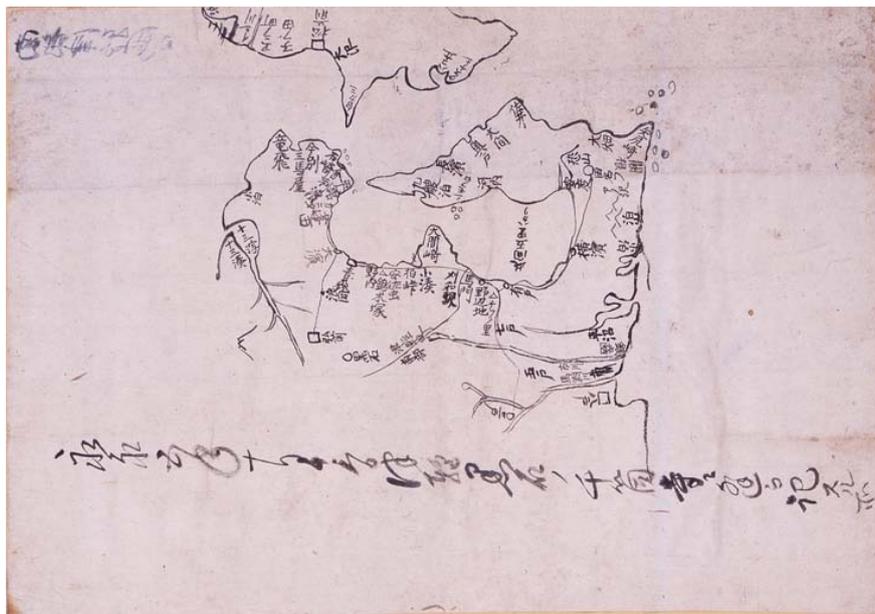


図10 「南部津軽図」 長久保赤水資料

また、初版『改正日本輿地路程全図』は下北半島が鳶口形であることが特徴であり、「改製日本扶桑分里図」も同様である旨を海野が論じているが²⁵、この「南部津軽図」の下北半島の形はまさに鳶口形であり、しかも「改製日本扶桑分里図」よりも鋭角となっており、「改製日本扶桑分里図」から『改正日本輿地路程全図』への変化の途中に置くにふさわしい形状となっている。

さらに、「南部津軽図」に表現される街道や河川の表現も『改正日本輿地路程全図』とほぼ同じであることも注目される。

これらの点から、「南部津軽図」は初版『改正日本輿地路程全図』の当該地域の重要な情報源となっていた可能性が高い。

・「人国記 下北・津軽半島」(図11)

34.4×24.2cmの紙片に津軽半島と下北半島の部分図が表現されている。現在は、黒画用紙に貼り付けられている状態であり、好ましい状態にあるとは言えない。また、図11のように、撮影をすると黒画用紙が透けてみえる結果となる。ただし、見方を変えれば、かえって紙の薄さが分かるような写真となったとも言える。これほどの薄い紙は、通常敷き写しに利用されることが多いが、この「人国記 下北・津軽半島」についても、地形をたどる筆の勢いがあり、また、下北半島南部付近では誤って海岸線を内陸深くまで表現してしまっている点を勘案すれば、おそらく敷き写しによって模写された図であると思われる。

表題は「人国図」とあったものを「人国記」に修正されている。いずれにせよ、「人国記」に収載された地図をもとにした原図があったと考えられる。



図11 「人国記 下北・津軽半島」

長久保赤水資料

- ・「松前へ ツカル三馬屋…」 (図12)

15.4×22.3cmの罫紙が用いられている。この資料は地図表現を含まない。

基本的には、蝦夷地に関する情報が記載されており、地名や距離のほか、その地域で獲れる魚介類についての話題や、伝聞情報なども書き留められている。そのいくつかを記しておく。

「松前へ ツカル三馬屋ヨリ十三里。此間ニタツヒ、中ノ潮、シラカミトテ三流ノ潮筋アリ。東風ヲ順トス。風緩ケレハ潮ニ流サレ南部沖ヘ漂ス」
「キイタツフハ東海商船通路ノ限也。獺虎モ此ニテ交易ス。此北数百里ニ当リテ一目ノ人栖島アリト云」

「白石云 紅毛ニ尋常鯨ニ数倍ナルアリ。唐土ニテモ海翁或大爺ナドト称スト云。皆大鯨ナリ」

「仙タイノ人曰 石巻ヨリーノ関二十八里。岩手ヨリーノ関十八里。皆古道ナリ」

興味深いのは、「一目ノ人」や「大鯨」といった人知を越えた生物についての情報に対して、赤水が積極的に情報を受け入れている点である。近世中期頃までは、出版日本図のなかに女人ばかりが住む「羅刹国」や異形の者が住む「雁道（韓唐）」といった中世説話に由来を持つ異域が日本の周辺に表現され続けていた。これまでは、そのような状況に終止符を打ち、「絵図から地図へ」と科学的な方向に地図表現の歩みを進めたのが、まさに赤水であると評価されてきたのだが²⁶、当の赤水自身は、そのような曖昧な伝聞情報について、必ずしも無視するのではなく、むしろ強く関心を持って書きとどめていることが、この資料からうかがえるのである。もちろん、重要なのは、そのように関心を示しつつも、赤水はその情報を地図には表現しなかったという点であり、地図にどのような情報を表現するのか、という赤水の姿勢を、ここにうかがうことが可能である。

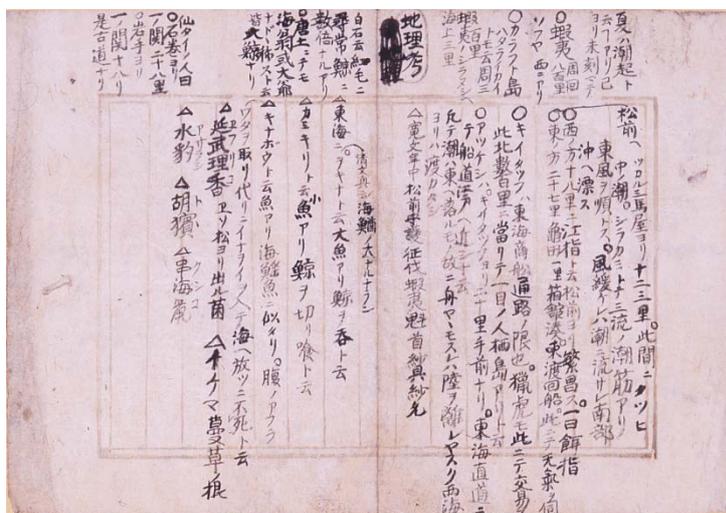


図12 「松前へ ツカル三馬屋…」 長久保赤水資料

・「松前ヨリ ヲヨヘ 白神…」 (図13)

本資料も、先の「松前へ ツカル三馬屋…」と同じく、地図表現は含まない。また料紙も15.4×22.3cmの罫紙であり、同種である。

本資料は罫線部分を上下に分け、松前から東に向かった時の地名と、西に向かった時の地名が列記される。

東：松前ヨリ、ヲヨヘ、白神、レヒチ、浪間、ヲリノカケ、居茶（スヘチャ）、カナカチ、尻内、有川、亀田、クヌヒ、セツチヒ、白、キシク、呉（クレ）イキ、シュロ、泗須泊、〔空白〕、筥（ハコ）立、アツケ、キイタツフ

西：松前ヨリ、子フタ、酒、飼指（エサシ）、ヲ上、上国、モンナヒ、ソフヤ
長久保赤水資料には、これらの地名がすべて表現されている地図はない。『改正日本輿地路程全図』の表現については、先述したように、蝦夷地については「改製日本扶桑分里図」と「南部津軽図」をもとにしたものであり、その地名数は本資料よりも圧倒的に少ないものとなっている。よって、本資料が出版日本図に利用されたかどうかは不明とせざるを得ない。

また、欄外には次のような表記がある。

日本訂正図

近江ニ〔餘湖【方半里】
伊香郡山中

越中 布施湖、佐渡 越湖、八丈ヲ豆腐ノ沖ニ書ス

おそらく、これらは日本図作製の過程における備忘録であろう。ただし、この備忘録がどの段階で作成されたのかを特定することは難しい。というのも、「改製日本扶桑分里図」には「余吾」と「八丈嶋」が、初版『改正日本輿地路程全図』では「ヨコウミ」と「布施海」、「八丈島」が記載されているが、「越湖」については何れにも確認できず、現状では判断不能となるのである。さらなる資料の

発見を待ち

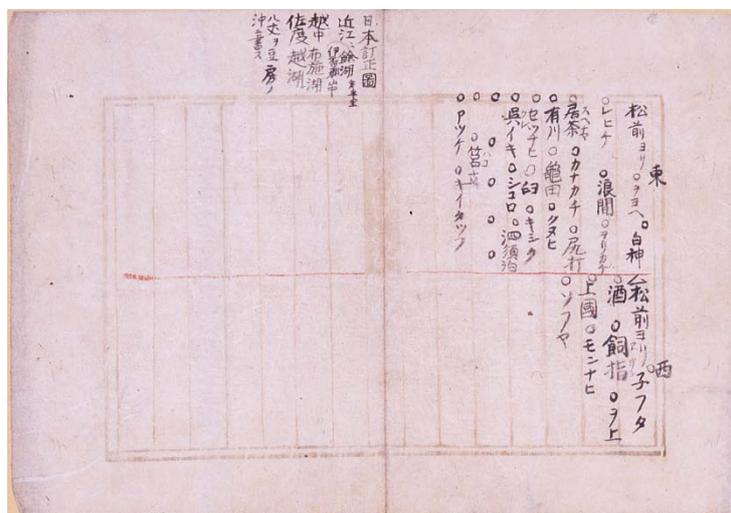


図13 「松前ヨリ ヲヨヘ 白神…」 長久保赤水資料

・「津軽海峡海路図」(図14)

この図はその他の地図資料とは異なり、「海」に重点が置かれている。より厳密に言えば、「海」を隔てて対置する本州(津軽半島・下北半島)と蝦夷地との距離というのが第一の主題として描かれた図である。それは、下北半島付け根部分にある大畑に添えられた「此処ヨリ松前ハ一向ニ見ヘス。タ、津カルヲ見ル」という表現からも分かるであろう。

それぞれの場所からの距離については、次のように記されている。

大畑－竜飛岬 「大畑与竜飛岬相去三十里」

矢尻崎－白神崎 「相去四里」

矢尻崎－竜飛崎 「矢尻崎与龍飛相去三里」

竜飛崎－白神崎 「白神与竜飛相去三里、三崎如鼎足」

赤水は、竜飛崎・矢尻崎・白神崎の距離感を「三崎如鼎足」として表現しているが、確かに三里－三里－四里であれば、この例えは適当であろう。

ただ、「津軽海峡海路図」自体はこの距離をふまえた描写とはなっていない。また、じつはこの矢尻崎(尻屋崎)の場所は本来、下北半島の北東にあるはずであり、きわめて不正確な位置表記となっている。

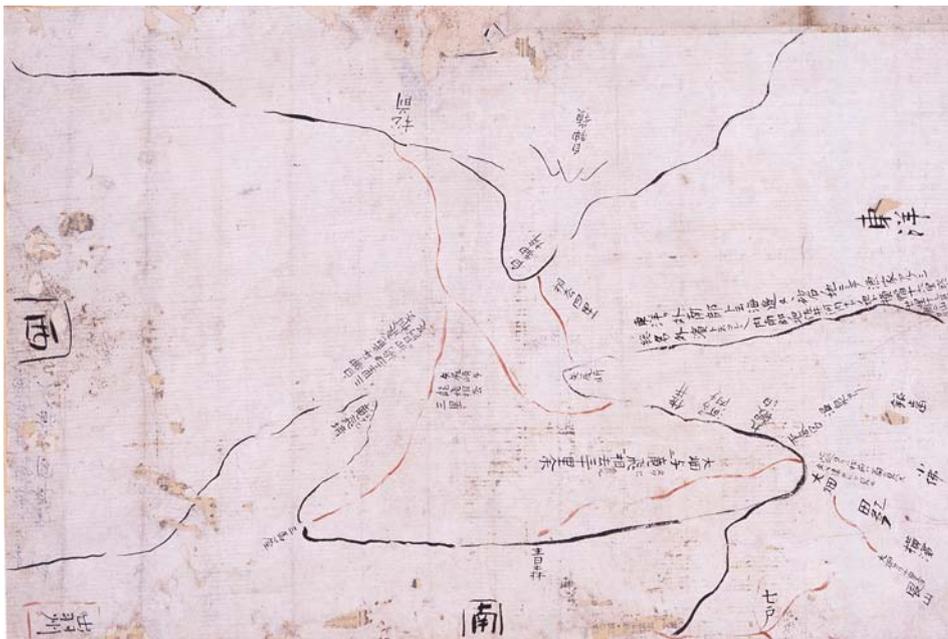
「改製日本扶桑分里図」や初版『改正日本輿地路程全図』でも上記の距離に関する知識が活かされた地図表現にはなっていない。また、再版以後の『改正日本輿地路程全図』には航路が追記されるが、それらとも一致していない。よって、現時点においては、この「津軽海峡海路図」が赤水の出版日本図作製に大きな影響を与えたとは言えない。情報収集のある段階で受容されたものの、赤水は積極的に本資料の情報を取り上げなかった、ということになる。

図14 「津軽海峡海路図」 長久保赤水資料

・「奥州郡分之略図」(図15)

本図は「吉備中州東園古松軒草稿」資料であり、古川古松軒の手によるものであることが分かる。長久保赤水資料には、古川古松軒作製の地図資料が他にもいくつか収蔵されており、赤水と古松軒の間に密接な知的交流があったことが残存資料からもうかがえる。

古松軒との交流は天明4年(1784)に始まったと考えられており、本資料も



それ以降に赤水の手になったとみてよい。この時点で赤水は、すでに初

版『改正日本輿地路程全図』を世に出しており、本資料は初版に活かされるこ

とはなかった。

ただし、本資料の地形の形状で注意しておいてもよい点が存在する。それはこれまで注目してきた下北半島の形状であり、これまでの鳶口形とは明らかに異なる形状をしている。そして、この形状は『改正日本輿地路程全図』の初版改訂刷本から導入された「斧形」²⁷に近く、さらに、尻矢崎（尻屋崎）の突出の具合に注目するならば、寛政3年（1791）刊行の再版版の形状の方がより近い姿となっている。よって、あくまでも推論の域を出ないが、赤水が再版の中身を検討する段階で本資料を活用した可能性もあるのではないだろうか。

図15 「奥州郡分之略図」
および部分図（左）

長久保赤水資料



以上、長久保赤水資料に残る津軽・下北半島周辺の情報が記載された資料を見てきた。津軽・下北半島周辺については、海野が初版本と初版改訂刷本を区分する重要な指標として提示して以来²⁸、赤水がこれらの地域の地理情報の収集に熱心であるという想定はなされてきたが、その実態についてはまったく不透明な状態であった。今回、

長久保赤水資料の具体的な調査によって、実際に赤水がこれらの地域に非常に注目しており、何枚もの地図を描き、さらにそれらを修正していく中で、地理情報を整理して行っていたことが明らかとなった。

津軽・下北半島付近について、版行の日本図——なかでも初版——の直接的な土台となる知識を提供した原図は「南部津軽図」であり、全体の基礎となっている「改製日本扶桑分里図」にはない知識を追加し、版行図に取り組んでいた。

おわりに

本研究では、長久保赤水資料のうち、重要な地図関連資料について写真撮影を行い、資料アクセスを整備すると同時に、それらの資料を用いて、赤水のもっとも重要な事跡である『改正日本輿地路程全図』の作製過程について、「経緯線」および「津軽・下北半島地域」という2つの点から、検討を行った。その結果、これまでの研究では具体的に論じられてこなかった赤水の地図作製における地理情報の積極的な受容、そして地図作製の取り組み方について、その具体像の一端を浮かび上がらせることができた。

『改正日本輿地路程全図』には柴野栗山による序が付されているが、それによれば、赤水は20年余りに渡る自らの見聞や文献調査、そして旅人や知人から得る情報をもとに、日本図を完成させていったという。今回、いくつかの資料に「〇〇云」といった伝聞情報が付されていることが確認できたが、その意味で、この栗山の赤水評はかなりの程度信憑性のあるものであると判断できることになる。問題は20年余りという点であるが、今回の分析に用いた資料は年号が付されていないこともあり、本研究の中で赤水の知的営為の歴史については明らかにすることはできなかった。しかし、これまでアクセスが困難であった長久保赤水資料について、より容易に研究できる工夫を本研究において実施することができたため、今後、さらなる資料の発見も期待できる。

本研究は、長久保赤水およびその地図について、新たな研究を進めるための基礎作りとして実施してきたが、森幸安との関係や、津軽・下北半島についての描写といった、これまでも取りざたされながら十分には論じられていなかった点について、資料をもとに具体的に論じ、新たな見解を提示することができた。その意味で、基礎作りという目的は、達成することができたのではないだろうか。今後も、さらなる検討を進めていき、地図史における長久保赤水、そして『改正日本輿地路程全図』の位置づけについて、再検討していきたい。

¹ 作図に投影法は利用されておらず、現代の経線概念と同一ではない。しかし、海野によって「実質的には経線」であったことが明らかにされている。①うんのかずたか「江戸時代の本初子午線」(『ちずのしわ』雄松堂出版、2005)、324-332頁(初出、『月刊古

-
- 地図研究』14-11、1984)。②海野一隆「藤原貞幹の日本図の原拠」(『東洋地理学史研究 日本篇』清文堂出版、2005)、510頁(初出、『古地図研究』311、2003)。
- ² 出版の経緯については、馬場章による詳細な検討がある。馬場章「地図の書誌学 —長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合—」(黒田日出男ほか編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、2001)、383-430頁。
- ³ ①長久保片雲『地政学者 長久保赤水』暁印書館、1978。②長久保光明『地図史通論—談義と論評—』暁印書館、1992。
- ⁴ 文化財指定を受けた資料の一覧が下記に掲載されている。高萩市文化協会『ゆずりは』11、高萩市文化協会、2006。
- ⁵ 横山功編著『長久保赤水書簡集』茨木新聞社出版局、2004、140頁(書簡番号77)。
- ⁶ 馬場 章「地図の書誌学 —長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合—」(黒田日出男ほか編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、2001)、383-430頁。
- ⁷ たとえば、拙稿「日本図の出版」、京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年—京都・日本・世界—』ナカニシヤ出版、2007、33-67頁。
- ⁸ 秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、1955(ミュージアム図書より新版：1997)。
- ⁹ 前掲9、29頁。
- ¹⁰ 前掲8、512頁。
- ¹¹ 前掲9。
- ¹² 前掲9、29頁。
- ¹³ 室賀信夫『古地図抄』東海大学出版会、1983、156頁(初出「地理」13-1、1968)。
- ¹⁴ 矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、1984、153頁。
- ¹⁵ 本研究の共同調査員でもある豊田智美氏の鑑定による。
- ¹⁶ 長久保光明・海野一隆「改正日本輿地路程全図」、海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『新装版 日本古地図大成』講談社、1974、60頁(初出は『日本古地図大成』講談社、1972)。
- ¹⁷ 長久保光明『地図史通論—談義と論評—』暁印書館、1992。
- ¹⁸ 川合英夫『黒潮遭遇と認知の歴史』京都大学出版会、1997、144-148頁。
- ¹⁹ 前掲3、および7。
- ²⁰ 横山功「新たな発見 「長久保赤水の京都旅日記」」ゆずりは8、2002、42-57頁。
- ²¹ 長久保片雲(1978)『地政学者 長久保赤水』暁印書館。および前掲22。
- ²² 有坂道子「木村兼葭堂と地図」(藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』京都大学学術出版会、2007)、388-409頁。
- ²³ 「伊豆国属島地図」の識語より。
- ²⁴ 前掲7。
- ²⁵ 前掲1、②。
- ²⁶ 前掲7。
- ²⁷ 前掲1、②。
- ²⁸ 前掲1、②。